

全国ホテル研究会情報交換誌

第40号

ホテル情報交換

目次

会員便り	1
第50回全国大会報告	10
ホテル情報館	15
発足50周年記念座談会記録	17
2017年ホテル発生状況調査結果	31
事務局だより	35

全国ホテル研究会

「全国ホテル研究会の半世紀とこれから」

2017年7月1日 新潟県関川村公民会館

大場信義（第6代会長）・遊磨正秀（第9代会長）・
佐久間桂祥（前事務局長）・中山歳喜（現事務局長）

事務局： 全国ホテル研究会発足50周年記念座談会を始めさせていただきたいと思います。まず、座談会のメンバーを紹介させていただきます。1994年から2000年までの間、会長を務められました大場信義様です。現会長の遊磨正秀様です。2005年から2009年まで事務局長を務められました佐久間桂祥様です。そして現事務局長の中山歳喜様、以上の4名です。本日のテーマは「全国ホテル研究会の半世紀とこれから」です。ではこれからの進行は、現会長の遊磨様をお願いしたいと思います。よろしくお願い致します。

全国ホテル研究会の歴史－5つのステージ－

遊磨： みなさん、こんにちは。改めまして、現在の会長をさせていただきます遊磨です。本日は、全国ホテル研究会50周年という非常に長い期間の、一つの節目としてこれまでの半世紀を振り返り、そしてこれからの考えるためにいろいろなお話をお聞かせいただくという企画で、今紹介していただきましたように、大場さん、佐久間さん、中山さんにお集まりいただいて話題提供していただこうと思っております。みなさんのお手元にあります全国ホテル研究会誌第50号の61・62ページに、「研究会の50年の歩み」として資料を載せております。それから本大会の地元誌の30・31ページにも座談会の趣旨と会の年表が載せてあります。本研究会は、滋賀県守山市在住の南喜市郎さん（初代会長）の呼びかけで始まりまして、滋賀県の守山市で第1回が行われたと聞いております。大場さんもそのときはおられたのですか。

大場： いや、参加していません。

遊磨： 残念ながらここにはその当時を知る方がいないのですが、以後日本各地で大会を開いていまして、ここに第50回の記念すべき大会を新潟県関川村で開かせていただいているところです。最初の年が半世紀前の1968年、昭和43年という、非常に古い時代からこの会が始まっております。いろいろな方が会長あるいは事務局長をされてこられまして、失礼かもしれませんが、会長の仕事よりも事務局長の方が大変だったと思います。最初の

頃は、四国におられます西尾秋雄さんや鳥取の村上美佐男さんです。それから圓谷哲男さん、佐久間桂祥さん、そして中山歳喜さんと、続いてきた事務局です。こういう50回の歴史を振り返りながら、今壇上にいる4人の中でこの会の歴史を一番長くご存じの大場さんに、まずは話題提供していただきたいと思います。特に、そもそもこの会がどうやって始まったのかということは、もはや誰も知らないのかも知れませんが、ご存じでしたらその頃の状況と、その後どのような変化があったかというようなことを、話題提供していただければと思います。こういうかたちで取りあえずみなさんの方から話題提供していただきまして、話を進めていきたいと思います。実はその前に、非常に残念なことに、今日の午後の発表でこの座談会で話題にしようと思っていたことをみなさん話されてしまったので、ちょっと中身が乏しくなってしまうかも知れませんが、それにもかかわらず時代的な整理も含めてお話いただければと思います。大場さんからお願いできますでしょうか。

大場： 再び、しばらくお耳を貸していただきたいと思います。全国ホテル研究会には、私は第5回、6回目くらいからでしょうか、45年くらいずっと参加しています。その中でいくつか会の目標が掲げられてきました。今現在5期くらいのステージに入ってきていると思っていますけれど、最初の段階では、公害とか環境破壊とかによって急激にホテルの生息環境が失われました。各地域でホテルなどに関心を持っておられた方々が危機感を感じまして、有志が集められて、最初は数十人くらいの方々がボランティア活動的に、全くスポンサーなしで活動を始められたという経緯がございます。そのときに、まずは絶滅させては困るということもありまして、ホテルの生態を調べて、保護増殖のための飼育技術に一番ウェイトを置いて、全国各地のいろんな方に呼びかけてその技術をどんどん蓄積していきました。初期の目標はそういう飼育技術に重点が置かれていたということになります。

その次に第2期に入ってくると、ホテルのすんでいる環境にもっと目を向けていって、水質や餌資源問題も含めて環境を再生しようという各地域の取り組みが、市民活動と一緒に展開されていきます。その会員の方々が中心となって、地域にいろんなアドバイスを送っていきました。

その後、行政との結びつきを非常に強めていって、第3期になりますと、個人的な力だけではどうにもならないことが多くなりました。そこで例えば環境省や国土交通省などと共同して、できることは一緒にやっという動きになりました。行政の方も市民の声が強くなってくるとかなり配慮するようになっていきました。河川工事にしても、各地域の方々の声が高まれば高まるほど、日本の中で確実にそのように進んでいきました。その中で、多自然型の河川環境の再生においては、治水とうまく両立する方法を模索していきました。そして、行政も市民のみなさまも一緒になって行動するように

なりました。

学校教育の中でも、こういった取り組みがどんどん取り入れられてきて、この研究会でも学校教育の現場でどういうふうになっているか、学校の先生を中心として、シンポジウムを繰り返されていったという経過がございます。これは効果抜群です。やっぱり振り向いたら誰もいないのでは困るわけで、育成していくのは非常に時間かかるのですけれども、今回のように中学生、小学生、そういう子ども達の頃から大人が新しい方向性を仕向けて行く。そしてそれにアドバイスを送るのは、この全国ホタル研究会のいろいろな経験や情報、それを提供する仲間だったと思うのです。

それから第5期に入ってくると、生物の多様性の問題が重要視されるようになって、私は環境問題が非常に重要だと思っているのですが、環境の多様性とか命の営みなどは、ホタルという相手の立場にならないと理解されません。そのためには、いろんな教育面も重要ですし、それをさらに裏付けするためのDNA解析などもどんどん進んでいますので、それが蓄積され始めて膨大なデータになっていると思います。「モニタリングサイト1000里地」というのは環境省で今進められている100年を軸とした事業で、これは行政としては珍しいと思うのですけれども、100年間を目標として、ホタルなどの身近な生き物を全国的にモニタリングしています。今年で10年くらいになるでしょうか、そのデータも膨大な量になりました。山梨県の環境省の生物多様性センターに、モニタリングの全データが送られています。

モニタリングサイト1000里地の状況は、今、日本自然保護協会にアクセスしていただくといろんな情報が得られます。全国ホタル研究会のみなさまが是非、国の国家戦略とか環境政策とかにも関わっていただきたいと思います。それから地域の固有性は、生物の多様性に絡んできますので、それを共有する良い機会になってくると思っています。この研究会では、学術的な背景に加えて、今後は人の営み、そしてその文化面、歴史的背景にも目をむけてほしいと思います。私は、歴史的背景をものすごく重要視しているので、今日の重要な課題だと思っています。

ホタルがつなぐ人の絆

遊磨： ありがとうございます。50年のこの会の歴史を大きく5つにまとめていただいて、非常にわかりやすく紹介していただきました。では続きまして、とりあえず話題をどんどん挙げていただきたいと思います。佐久間さん、2005年から事務局長されてましたね。何かこの会の大きな変化がありましたか。

佐久間： 特に大きな変化というのは思い当たりませんが、今日ここへ出席させていただく前に岡崎の古田忠久先生（第7代会長）という、遊磨先生の前の前の会長と電話で話をしました。「先生、座談会があって先生の代わりに行くよ。何をしゃべって来りゃ良いかね」

と言ったら、先生は「私は昭和43年の第1回大会から昨年まで皆勤賞で出席しましたよ。50回大会は是非行きたいけども、家庭の事情で行けません」と言われまして、さらに何を言うかと思いましたが、「集まってみえる人みんなに感謝をして来い」と。「毎回出られて、たくさんの人に会えて、みなさんがこういうふうに全国ホタル研究会を50回まで支えてくれたことに心から感謝がしたい。遊磨現会長、大場先生達のご尽力には全く頭が下がる、とそういうふうに言ってこい」という話でした。古田先生が思い出として残っているのは、ホタルの会が始まったころ岡崎の古田先生、萩原先生、三矢先生が写真集を出したことだと言っておられました。古田先生は学校の教員でありながら、よく49回も毎回出席できたね、教育長に人気が悪かったらろうという話を時々するのですが、やっぱりその情熱はすごいものでした。私もこの檀上へ上げてもらったのは、ホタルのおかげだと思っています。

私の近所に平原ゲンジボタルの里がありまして、平成2年の夜中にそこに行ったら、1匹のゲンジボタルが頭の上を飛んだのです。これはすごいな、生まれて初めて見たゲンジボタルにどきっとして、よしこれをやるぞという意気込みになって、その日に覚悟しました。その後、平成3年からホタルの里作り、保存会作りを手掛けて、愛知ホタルの会を結成して、先程写真に出ていました大山川の自然を守る会の石田弘幸会長さんと一緒に、全国ホタル研究会小牧大会を開催しました。その後、平成17年に西尾でも全国大会を開催しました。そういう思い出がたくさんありまして、このホタルのおかげで全国のたくさんの人を知ることができたという気がして、私も感謝しております。最近はどこに行っても、頭を剃っていくもので、みんなが頭だけは覚えていてくれて、また今年会えたねと話をしてくれます。そういうことを思ってみると、ホタルという小さな虫は人間をいっぱい引き付けます。あるときにホタルの里に、お歳を召されたおばあちゃんがホタルを見に来ていて、その上をぽっと飛んだのを見て、「あー、これがゲンジボタルだね、もうわしは死んでも良い」と言った。なんだと思って聞いてみたら、「生まれ九州で、九州では子どもの頃から毎年ホタルを見ていた。愛知県に嫁いだらさっぱり見えなくなって、それで死に際にもういっぺんホタルが見られたら良い」とおばあちゃんが言うのです。こういう人達がいるならもうちょっと一生懸命わかり合えれば良いなという気がします。そして、ホタルの里をやっておるといろんなことがたくさん起きます。学術的には何も知りませんが、ホタルのような小さな虫が光るといのはほんとに美しいことです。

私のところは寺ですが、境内でヒメボタルの飼育をしまして、毎年数百というヒメボタルが見られます。どうしたらたくさんホタルが見えるかなと考えていると、「餌やれば良いよ」と古田先生が言う。「ホタルの喜ぶものをダンボールにたくさん入れてやりなさい」とか、「野菜の生ごみが良いよ」とかいうのを聞いて、うちで餌をやり

ながら毎年楽しんでおります。でもだいぶん歳をとりまして、市役所に勤めていたのですが、市役所を退いてから18年くらいになります。「この頃いろんなことを忘れてしょうがないな」と言ったら、「あ、そうだ。御主さん、あんた地方公務員だからか、すぐに痴呆が出るね」って言われて、当たっているという気がしました。この会では、来年の稚内と再来年の久米島までは参加して、みなさんの顔が見たいと思っていますので、よろしくをお願いします。

持続性のあるホタルの会へ

遊磨： ありがとうございます。最近のこの会の事務局を務めていただいています中山さんの方からも話題をお願いしたいと思います。

中山： みなさん、こんにちは。今、50周年という歴史ある会の事務局長をさせていただいております。これは大変光栄なことだと感謝しております。ありがとうございます。佐久間さんのお話の中に古田先生のお話がありましたけれど、実は私、前会長の中村光男先生（第8代会長）とは北九州市で私と同郷であります。今回のこの50周年に当たって来られる予定だったのですが、どうしても事情の許さないことがあって欠席されております。中村前会長は、古田さんと同様に始めの頃から長く会に関わっていらっしゃる方で、地元の北九州でも北九州ホタルの会の会長として長くホタルの保護活動や研究活動に携わっております。私は中村前会長との付き合いの中でこの会を知る事ができました。ここに登壇されている方に比べれば遥かに私の歴史は浅いのですが、30回の北海道恵庭大会からの参加ですから、まだ20回くらいしか参加していなくて、その前のことは歴史の中でしか知ることができません。それで目下、事務局長としての私は、この会に対する課題として持続可能性というキーワードと考えています。せっかく50年もの歴史がある会ですので、これから次の50年も持続可能なように、どうしたらみなさんの要望にそったような会ができるのか、あるいは社会の要請に答えられるのか、個人のそれぞれの自己実現ができるのかを模索しています。参加されている方々には、いろいろな思いをお持ちでしょうが、その方々の思いが達成できるように、持続可能な会になるようにしたいと思っております。それにはまず何といても財政的なものがないと会は持続できませんし、みなさんに持続可能なことが身に付いていないと当然できない訳ですので、その2つをキーワードのもとでこの会を運営できればと思っております。

時代の流れと大きな変革

遊磨： ありがとうございます。やはり、会というのは当然ながら人を繋ぐものでありますので、多くの方々が毎年のように顔を見せていただけるのは大変ありがたいことと思っております。最初に大場さんが整理してくださいました長い歴史の問題に立ち返りたいと

思います。今日の午後もいくつかこれに関連する議論がありました。この会として、大きな変革が2つくらいあったと思います。

その1つは、大場さんがおっしゃられましたように、保護増殖に関することです。確かにそれがこの会の初めの大きな目的だったと思います。それは時代的には仕方がないことだと思います。僕自身がホタルのことをいろいろ調べ始めたのは1976年で、そのあとしばらく経ってから鳥取大会から参加させていただきました。その当時、村上さんが、飼育技術のことをすごく熱く語っておられて、僕もびっくりしてしまって、すごい人があるなと思った次第です。確かにその当時、今でも全部がわかっているわけではないのですが、ホタルがどんな生き様をしているのか、そもそも何を食べているのかから始めて、どんな成長をするのか、どんなところに住んでいるのかというようなことまで、わからないことだらけだったのです。これらは多くの方々の知恵なり、観察結果から少しずつ解き明かされてきました。確かに当時、いろんな環境的な諸事情の中で、ホタルに限らないのですが、いろんな生き物が激減している時代だったわけです。そこで増やすためには飼育で増やすだけでなく、あちこちから子種を持って来て導入するということも盛んに行われた時代だったのです。そういう時代が結構長く続いたと思います。この会としても10年程そういうのを続けてきました。必要とされる会員の方々等々には幼虫、卵をお分けするという時代が結構長かったと思います。でもそういうことはあまり良くないことではないかという風潮も少しずつ入り始めて、止めてしまいました。ですけれども、この会としては、僕がこんなことをいうことも何ですけれども、絶対放しちゃいけないとかいう話ではないと思います。まずは、どういうところに原因があるかを、みなさんにいろいろ突き詰めて考えてもらおうというのが基本姿勢だと思います。もちろんその中にはいろんな問題点があるでしょう。例えば、多くの方々がそれぞれの地域で保全活動をされていますが、その中には贅沢な例としては、たくさんいるので減らないように保全したいという立場もあれば、減ってしまったので何とか増やしたいという立場とか、一番寂しいのはいなくなってしまったので何とか再生したっていう立場とか、いろいろあると思います。それぞれによって少しずつやり方は違うと思います。

そういう中で、この会として、いろんな外圧もあったのですが、本会では、ホタル類の成虫や幼虫の放流と他の地域からの移植に関する指針を2007年に策定しております。これは結構、他の学会より先がけて作ったもののようです。当時はあまりそんなことを考えていなかったのですが、やはりこの会としてもできるだけ良い方向に進めたいという時代になったと思っています。ただ今日、大場先生が講演の中で話されておられましたけれども、ホタルが実際にどんな所で住んで、どんな暮らしぶりをしているのかということについて、最近そういう観察例があまり報告がないように思います。僕も報告していませんね。みなさんはそれぞれに観察されていると思うのですが、こんなことはも

うすでにわかっているのではないかと、心配されているような風潮がある気がします。案外そうではなくて、それぞれの地域の固有の習性とか、特殊な生態がたくさんあるように思います。そういうことを、これからもこの会としていろんな情報交換をしていければ良いと思っています。

教育の場への期待

遊磨：　そして2つ目の変化の問題として、大場さんにもう少し追加のお話をいただきたいところがあります。この会があちこちで大会開くときに、地元の方々との結びつき、あるいは行政との結びつきに対して大きな橋渡しの役割を担ってきたと思うのですが、そのときの行政との対応に何か問題がありましたでしょうか。また、学校教育の場もどういうところが本当は大事で、今まで何か問題点があったのかということも含めて、もう少しコメントいただければと思います。

大場：　この研究会の発表では最近、限られた人しか発表していないように私は思います。ホテルの研究をしている学校の生徒さんとか地元の方々がたくさんおられて、非常に多くの幅広い、素晴らしい研究をされているので、この研究会にもっと気楽に参加して、今、遊磨会長さんが言われたように、あんまり肩肘張らずに、うちはこうですというような会員の方々の発表を、むしろ私は聞きたいと思っています。このままいくと閉ざされてしまうような気がします。もっと開かれた、誰でもが参画できるように、発表時間も長く取らなくても良いから、そういう場があったらいいと思います。それから特別寄稿などもありますから、そこに投稿してください、あるいはコラムでもいいでしょう。先程も話をしていたのですが、初見日に交尾を見たとか、そういうことですらあまり記録に集積されてないと思うのです。ですから、みなさんが、これからこの会に直接介在していただけることを私は前から願っていました。そういうものがないとやっぱり寂しいものです。これにはちょっと工夫する必要があると思っています。

それから、学校教育ということは非常に重要だと思います。ただ、それをどうやって継続していくかが問題で、昨日私がコメントしたのですが、日本の中でその仕組みが十分対応してないのです。今、学校現場がものすごく忙しいことは良くわかっていますので、ああだこうだ、と押し付けてもこれはうまくいかないでしょう。もっと何か楽なシステム作りのアイデアを、みなさんが実践している活動の中で出し合って、うちではこういうことがやれるとか、そんなことを出し合ってほしいですね。ミニシンポジウムでも開いて発表していただいたら、是非私も参考にしたいと思っています。

それから、ホテルは人と人を結びつけてくれるのですが、そういう立場にならないとホテルは理解できません。例えば、環境条件ひとつをとっても、それが良いか悪いかと

というのは人間がジャッジするのではなくて、自然やホタルがジャッジすることだと思います。個人だと色々な観点が違ってきますから意見はバラバラになりますけど、それをホタルにジャッジしてもらえれば、それほど間違えることはないだろうと思います。そういうことをみなさんと一緒になって共有していきたいです。だからこの研究会の1つの目標が、「ホタル」っていうことになっているのでしょう。これには「ホタル」に限らず、人の自然感とか文化とかすべてが関連してきます。教育目標にしても、ただホタルを飼うというだけじゃなくて、残酷にも餌をつぶしてやるとかいうことでもなく、必要な量だけ食べてもらうという、そういう原点に立ち入って生き物の命を大事にして見守っていくことが大切でしょう。指導者側からも、この研究会の方々からも、子どもたちの将来にメッセージを送ってくださると、どんどん輪が広がって、実を結ぶものになっていくという気がします。

遊磨： ありがとうございます。学校教育の場と言ってしまいましたが、実は我々どんな年代になっても常に勉強の場にいると思います。こういう所に来て、私自身、今日もいくつも学ばせていただきましたし、年寄りの勉強の場と言ってしまうと失礼かも知れませんが、いつになっても勉強というのは続くものだと思います。その中でも学校教育の現場というのは、先生のご努力があつてのことですが、非常に大きな問題をかかえていると思います。確かに大場さんがおっしゃられるように、何年かに一度、教育に関連したシンポジウムのようなものでサイクリックに話し合う機会をこの会でもっていくのが良いかも知れませんが、特にホタルは夜の調査になります。中学生なら良いというわけではないのですが、小学生の子たちを夜の暗い所へ連れて行くというのはなかなか大きな問題があると思います。ご家庭の方のご理解、地域の方のご理解がないとなかなかうまく進まない問題ですが、そういう単純な問題も含んでいると思います。ですがその一方で、やはり地域の宝というのもみなさんに、住んでいる方々に、特に若い次世代を担う方々にも知ってもらうことも非常に大事なことだと思いますので、是非このことも積極的にこの会として進めて行ければと思います。

行政や教育の場との協調

遊磨： 佐久間さん、その一方でこういう会に対して、いろんな外圧がかかって来ていたと思うのですが、何か会にこんなことをして欲しいとか、どうしてこんなことをやらないのかみたいな要望はありましたでしょうか。

佐久間： 先程話が出ましたように、全国ホタル研究会の財政的な問題があります。何とかして会員の増強が是非必要だと思います。愛知県のことと言いますと、愛知ホタルの会で総会をやるといういろんな人がたくさん集まって来て、その中でホタルの観察会や飼育をやっ

ています。ところが、その人達を全国ホタル研究会の会員にしようとする動きはなかなか少ないのです。全国でも数限りないホタル関連の団体があると思うのですが、そういう人達に全国ホタル研究会へ入ったらどうですかという働きかけをするというのも、1つの手だと思います。

そしてもう1つは、行政がどれだけホタルの方へ目を向いてくれるかということです。私が最初にホタルのことを始めたときは、私は市職員でして、今でいう生涯学習の仕事をしていました。実は最初に総会に出たのは長崎県で大会があったときで、保存会の人たちとみんなで行きました。そのときには、市で予算を組んで旅費の派遣申請を出して、こういう大会があるので行って下さいと、地元の人達にお願いをして参加したという経緯がありました。そのときは行政も話を聞いてくれて出張旅費を組んでくれました。まあ自分で組んだのですが。それで、例えば今日、関川村へ来るのに自分のお金だけで来た人、ある程度はどこからかお金が出た人、出張旅費で来た人といろいろあると思います。やっぱりこういう大会に出易いように、行政ももう少し目を開いてくれても良いかという気がします。選挙公約を見ていると、自然環境の保全という内容も公約にあげてきますが、「先生、自然環境の保全って公約あげたけど、何をしてくれたの?」。何もしてくれない。そういうことも1つの働きかけで大きく変わるかもしれません。西尾の保存会のことばかり言って悪いのですが、最初保存会ができたときには保存会の維持管理費で年間100万円を行政がくれていたのです。それが最近どんどん減って、それでも今70何万円です。それでもくれるので良いのですが、そういう行政、または公害を振りまく産業や、財界の方からも多少は援助をもらえるような働きかけも必要じゃないかと思えます。将来、財源的に安定することが非常に大事ですのでよろしくお願いします。

遊磨： 財政の問題、なかなか辛いところを突かれるのですが、行政の方ともうまくやっていこう、あるいは住民の方から行政に何かお願いしようとしたときに、どの窓口にどういうかたちでもって行ったら良いかわからなくなります。それに関して何かアドバイスありますか。

佐久間： 簡単に言いますと、今の生涯学習の担当の所へ行くのが良いのですが、それよりもホタルの好きな市の職員を巻き込むのが一番手っ取り早いです。それから、子ども達もそうなのですが、いくつかの小学校、中学校では、ホタル類の幼虫を飼育して毎年放流式をやっているのですが、これについてみんなの前で表彰されるとか、というような脚光を浴びることがほとんどありません。例えば、野球とかバレーとかテニスで優勝したりすると、表彰状が出て脚光を浴びるのですが、ホタルの飼育をやっている科学部員の子が脚光を浴びることがほとんどない。それでうちの保存会で考えついたのが、中学校3年生を卒業するとき、小学校6年生を卒業するとき、ホタルの飼育に関わった子には、ホタル

保存会から感謝状を出して記念品をちょっとあげるのです。そういう制度をもうずっと十何年していますが、これも子ども達に熱を持たせる1つの手立てかなと思います。前の西尾の教育長が、「中学校で一生懸命ホタルの幼虫飼育をやって3年間科学部をやってきた子は、高校入試のときの推薦分にワンポイント足せんか」と言っていました。そんなこともあればもっといいのでしょうね。

遊磨： 佐久間さん、そういう知恵をまとめて研究大会で紹介してください。

佐久間： 私も口下手ですので、なかなか。

遊磨： 中山さんは、環境に対する最近の動きも少しずつ変わってきていると感じてられると思うのですが、同じようにこの会に対する要望をもらったとか、あるいは会としてはこんな要望がくると本当は助かる、といった話がありますか。

中山： そうですね、その前に、佐久間さんの話の続きになると思いますが、生涯学習とか、教育とかにホタルを使っているいろいろやるというのは、全国で多くなされていると思います。佐久間さんのように市職員で行政として生涯学習でいろいろやったり、行政が市民を巻き込んで市民講座を開いたり、市民セミナーを開いたりというのも、全国でもいろいろやられていると思います。私も実は、仕事柄もあって、生物調査とか環境学習、セミナーとかに関わりがあります。また、全国にもっと多くの行政が、地道なまちづくりとか人づくりに取り組んだりしています。その一環として、自然環境とか、ホタルの飼育や、ホタルの保存を通した、まちづくりとかやっているところも、たくさんあります。そこで環境にかかわっている人達は、こういう研究会に何を求めているかということ、全国ではどんな成功事例があるのか、これは今まで50年の歴史で何回も紹介されているはずですが、やはり一番大きな要望としてそういうことを知りたいのだと、私自身、常に思っています。最先端の研究を聞くのはもちろん大切なことですが、全国ホタル研究会の創設の趣旨からすると、全国の成功事例の共有化のようなことを求められていて、これは会としてとても大事なことだと思っています。行政の若い担当の職員の方は、どうして良いかわからないところは、こういう研究会に聞けば良い、研究会ではこういう成功事例があるというのがあれば、会員の平均年齢がぐっと下がってくるようになるのではと期待しています。

それからやっと会長の質問ですけど、本会の役員の方の問題意識や要望は、事務局で把握できますけれど、一般の会員の方が何を希望しているのかというのは、事務局では把握が非常に難しい。これはどんな会でもそうだろうと思います。でも我々の、全国ホタル研究会の良いところは、この後もいろいろなセッションがありますので、その交流会でお酒を飲んで情報をたくさん聞く機会をもってきました。今日も次回、次々回の大

会を事務局からお願いすると思いますけれど、みなさんが、じゃあこれをやってくれということも是非、また耳が痛いことでも結構ですので言っていただければと思います。

社会への働きかけ

遊磨： ありがとうございます。ホテルが人を繋ぐというだけではなくて、人を繋いでホテルを守るということも必要だと思います。今年、ホテル関連の文献目録の新しいものを作らせていただきました。約6,000件の日本の文献が集まりました。海外のものを全部集めている訳ではないのですが、やはり日本の方のホテルに対する情熱というのでしょうか、いろんなニュースを発信したいという情熱はもう大変なものだということを改めて認識させられました。それと同時に、日本にどれくらいホテルに関係する会があるのか、各地域にあるのかを調べていました。すると1,000を超える団体がありそうです。これらの団体に関しましても、この会として情報収集を進めていきたいと思います。こういうところから改めてネットワークの作り直しもしていきたいと思いますし、我々の知らない成功事例もいっぱい出てくるとも思っています。

この会は50年経ったわけですが、実は我々として一番問題にしているのは会員数の減少です。それから、少なからぬ団体の方々からもお聞きするのは、各会員の方々の高齢化ですね。新しい世代の方になかなか入っていただけない。この辺りの問題はこの会だけではないかも知れませんが、学校教育にこれだけ頑張っているのにどうして新しい人が入ってこないのかと思いますし、行政の人もう少し協力してくれてもいいのかと思います。こちらはいろいろ期待するわけのですが、ちょっと歯車がかみ合っていないところもある気がします。ということで、今後この会がどのように進んでいくか、はっきりした道が決まっているわけではないのですが、当面は今までの道りを踏襲するしかないと思います。やはりホテルを一つの軸に据えた環境、あるいは文化や歴史までもと、大場さんがおっしゃいましたが、そういうところを広く扱いながら、みなさんといろんな地域に関する話題を議論し、情報交換していくという場として、この会を続けさせていただければと、私個人では願っております。せっかく来ていただいている方々に、こんな会にして欲しいなという要望がありましたら手短かにお願いしたいと思います。大場さんからお願いできますか。

大場： ちょっと違った観点から話します。今、実はホテルを減らしている大きな要因の一つとして、遊磨会長も言われていますけれど、人工照明の問題があります。これについては、かつて静岡の大竹和夫さんが提言されていて、私も非常に強く同感しました。現在なお継続して工夫しているのですが、ある町では良いものができても、なかなか採用で

きる仕組みになってないことがありました。LED化が非常に一方的に進んでしまって、本当は良いものが、なかなかそこに入り込めないという状況があります。今後そういった仕組みを少し改善して、もっと実質的に良いもの、それは人間にとっても良いし、ホテルにとっても良いし、防犯上にも良いというようなものが、だんだんできあがりつつありますので、それをどんどん取り入れてほしいものです。もし要望があれば、私がある程度紹介できます。私個人がやっているわけではないのですが、研究を8年くらいきちっとやった中で、かなりベースのあるものが今できあがりつつあります。ただし、人工照明は最善策がないと思います。なぜならば、人工照明はホテルにとってないことが、最善だからです。こうしたなかで、神奈川県逗子市のホテルがいる所で50本ほどの照明が新たに交換されました。そうしたら、たまたま今年だけの話かもしれませんが、ホテルが倍増したそうです。少なくともそれがマイナスの要因ではないということになりますので、今後もモニタリングして、良ければそういうことを具体的に進めて、ホテルを減らす要因をできるだけ減らしていくことは、具体的な方策として良いと思っております。

未来へ向けて子どもたちに感動を

佐久間： 前にホテルの里の番人やっておるときにこんなことありました。遠くからホテルを見に来たアベックがいたのですが、ゲンジボタルがほとんどいなくて、「おじさん、ホテルいないね」と言うので、「ヘイケボタルなら見られる所あるけど」って言いました。そしてそこへ連れて行って車が止まったら、ヘイケボタルが水田からぱっと浮いてきた。そしたら見ていた女の子が「わー、すごい。寒気がする」と言って座りこんで…。すごい喜び方するなとびっくりしました。数年経ってから、また同じようなケースがあって、連れて行って、ぱっと出てきたら、それを見た女の子が「あー、綺麗ね」と言った。やっぱり最近の子どもは、感受性が弱いのかなと感じました。そうしてみると、小さい子どもの頃から物事に感動することを教えてあげないと、全国ホテル研究会の若い会員も増えないという感じがします。

私の所では、寺小屋でして、小学校1年生から3年生の子どもを90人、1週間に2回ずつ集まってもらっています。子ども達には思いっきり土の中で、泥んこになって遊ばせることもやっています。それからある先生が言っていました。「子どもに、セミが背中をぱかっと割って出てくるときの姿を見せたい」と。それでパソコンを開いて、子どもに「おい、セミが出るときには、こういうふうに背中が割れてぱっと出てくるんだ」と教えたら、子どもは「あー、そう」と全然感動しなかった。これはいかんなと思ひ、現物を見せようと思って、お父さんが前の日からセミのいる所に行って待っていた。そ

うしたら午前3時だったそうです、頭と背中が割れて開きかけたので、すぐ子どもを起こしてきて、「おい、セミが羽化するぞ」って言って見せたら、子どもがすごく感動したということです。やっぱり、そういう感動するっていう機会を小さい頃から与えておかないといけませんね。大きくなってからホタル見て「あー、綺麗ね」じゃあちょっと寂しいです。やっぱりそういう手立ても時には必要だと思います。これからの子どもには、スマホをいじり出す前にそれを教えてやりたいなという気がします。なかなか会員の増強というのは難しいですが、やっぱり基礎から築いていかないとだめだと思います。

中山： 本当におっしゃる通りですね。実は昨晚、遊磨さんと同じ部屋だったものですから、夜遅くまで話をして、遊磨さんの学生時代の話聞いていました。大学生のときには虫捕りばかりしていて、ある民宿に1週間泊まったそうです。民宿の一部屋を借りて、夜中じゅう明かりを付けて蛾を捕っていたそうです。民宿の人も何も言わなくて…。こういう学生が大きくなってホタル好きになったのだらうと思いました。佐久間さんのお話の通り、やっぱり子どもときの感動する体験というのは本当に大事ですね。その面でホタルっていうのは、もっとも一般の人に受け入れられやすいのかもしれない。全国ホタル研究会ってホタルだけの名前の付いたこの研究会が50年も続いているのは、ある意味、これは奇跡だと思います。私も小さいときは昆虫少年だったのですが、ここにいらっしゃる方は、みんなそんな人の集まりかなと思います。そういう子どもたちを増やすということが、時間がかかりますが、ホタルの会が、持続可能になることなのかなと思います。

遊磨： ありがとうございます。もう時間も迫っておりますが、先程ちょっと大場さんがお話をされました人工照明のことを補足します。たまたま、今年の研究会誌の後の方に、動植物の対する「光害」、特にホタル類への影響について、ホタルに限らず、それこそコウモリから魚から他の昆虫から、どういう問題が指摘されているかということについて、海外の論文がかなりありまして、総説的な文章を書かせていただきました。ホタルに関しては、日本での仕事が多いのですが、海外でも光の問題が、やはりホタルに関することを含めてたくさんあります。日本でも、大場さんのお話に出てきました沼津の大竹和男さんの仕事、それから新潟の中川七三郎さんのお仕事なんかも非常に先駆的な仕事として位置づけられると思います。行政も含めていろんなところに巻き込んでいかなければいけませんし、そのためにはいろんなアイデアについてこちらで身銭をはらって、予備的に調べなければいけないこともあるかも知れません。できるだけいろんな方とのコミュニケーションを大切にしながら、ネットワークを大切に、この会を進めていき、なおかつその感動というキーワード、非常に良いキーワードをいただいたと思うのですが、

感動をできるだけ多くの人に伝え、あるいは私達自身も新たな感動を得られるように、この会を末永く続けていきたいと思えます。どうか皆さま、ご協力をよろしくお願い致します。つたない進行になりましたけれども、もう時間となっておりますので、ここで座談会の方を閉じさせていただきたいと思えます。ご静聴ありがとうございました。